

# ナガニシ（ヨナキ）種苗生産 の手引きについて



栽培養殖部 米司 隆

ナガニシはイトマキボラ科の巻き貝で、広島県ではヨナキと呼ばれて珍重されています。ヨナキと呼ばれる巻き貝には、ナガニシのほかにコナガニシも含まれますが、ナガニシやコナガニシを食する習慣は広島県や石川県などごく限られた地域にしかありません。かつて広島県内でも、底びき網や刺し網、いさり漁などで漁獲されていましたが、近年生息数が激減し、漁獲されることは極めて稀になっています。現在、県内で流通しているもののほとんどは県外から移入されたものです。水産海洋技術センターの前身である水産試験場では、平成11年から16年にかけて種苗生産技術開発に取り組んでおりましたが、その過程で得られた知見を取りまとめて、この

度「ナガニシ種苗生産の手引き」を作成しました。手引きには、ナガニシの生活史、採卵（親貝の入手、産卵、卵管理）、稚貝の飼育について記載しています。ここでは、その概要を紹介します。

貯水槽・濾過槽 親貝や稚貝などの飼育水槽に海水を供給するため、<sup>しゆくすいそう</sup>貯水槽を準備します。飼育水槽容量の2倍程度の貯水槽があれば、急な停電などにも対応が可能です。また、濁りなどを取り除くために、少し大きめの<sup>ちんでんそう</sup>沈殿槽を兼ねた2KL～10KL程度の貯水槽があると好都合です。海からの揚水も、小型の水中ポンプで十分で、ろ過槽があれば万全です。

採卵 ナガニシは、ウミホウズキと呼ばれる<sup>らんぼう</sup>卵囊の中に産卵します（図4）。産卵する時期は4月中旬から6月末までで、最盛期は5月です。この時期に得られる卵は、歩留りが良く、最も良質です。そのためには親貝は4月中には確保し、500～2000Lの水槽に収容しておきます。1000L水槽で飼育する場合は、50～100個体程度が適当です。しばらくすると、ナガニシは水槽の壁などに卵囊を産みつけ始めます。1個体の親貝が産む卵囊の数は平均20個です。50個体の親貝から、1.5～2万個体の稚貝を確保することができます。

卵囊の管理 卵は卵囊の中でふ化し、トロコフォア幼生、ベリジャー幼生を経て、稚貝となって卵囊からふ出されてきます。産みつけられた卵囊は5～10日毎に水槽などから剥離して、産卵時期ごとに分けて管理します。



図1 ナガニシ稚貝





図2 市販のタライを利用した稚貝飼育用の水槽

産卵からふ出までは40～60日で、早期に産卵したもののほどふ出までに長い期間がかかります。

稚貝の飼育 親貝を飼育した水槽を、そのまま稚貝飼育に使うこともできます。また、海苔採苗用の水槽が残っておれば、表面を塗装するなど補修して使用することも可能ですが、直径60cm前後の50L程度のポリエチレン製のタライを使用すると便利です(図2)。このタライを使用すると3000個体から6000個体の稚貝を飼育できます。親貝100個体から産卵させる場合は、タライを10個程度用意すればよいでしょう。注水量は、初期には40回転/日に調節し、成長にあわせて増やしていきます。また、糞などが排水ネットを塞がないように、週1回程度掃除するなどして気をつけてください。

餌料 ナガニシは元来肉食性で、魚介類の死骸などを食べていると考えられます。当初、稚貝は海藻や植物性の付着生物などを食べるのではないかと考えましたが、稚貝も動物性の餌料を好みます。最初の1ヶ月間は、冷凍魚肉をミキサーでジュース状にし、ネットで濾したる液

を与えます。それ以後は、冷凍魚肉やアミエビをミキサーにかけてそのまま与えます。餌は毎日1回与えます。選別 ふ出後2ヶ月以降の管理は比較的容易で、2ヶ月に1回程度、大きさを選別し、さらに死貝を取り除くことが、比較的大きな作業でしょう。選別は、家庭で使っている洗淨カゴなどの目合いの異なるものを数種類用意しておけば比較的簡単にできます。

おわりに はじめは試行錯誤を重ねながら苦勞をしましたが、ナガニシの種苗生産は比較的簡単にできることがわかりました。親貝の飼育には少し大型の水槽が必要ですが、卵嚢や稚貝の管理は家庭用のタライのようなものでもできますし、大がかりな施設は必要がありません。これに、餌料貯蔵用の小さな冷凍庫があれば十分です。ナガニシは、他の魚類に比べると放流場所への定着性は各段に高い生物です。ただ、漁獲サイズまでの成長には十年以上を要し、ナガニシ資源の回復には長い目で見た取り組みが必要です。低コストで比較的簡単に種苗生産ができますので、地元特産の復活を目指して挑戦してみたいかがでしょうか。



図3 ナガニシ稚貝の拡大写真

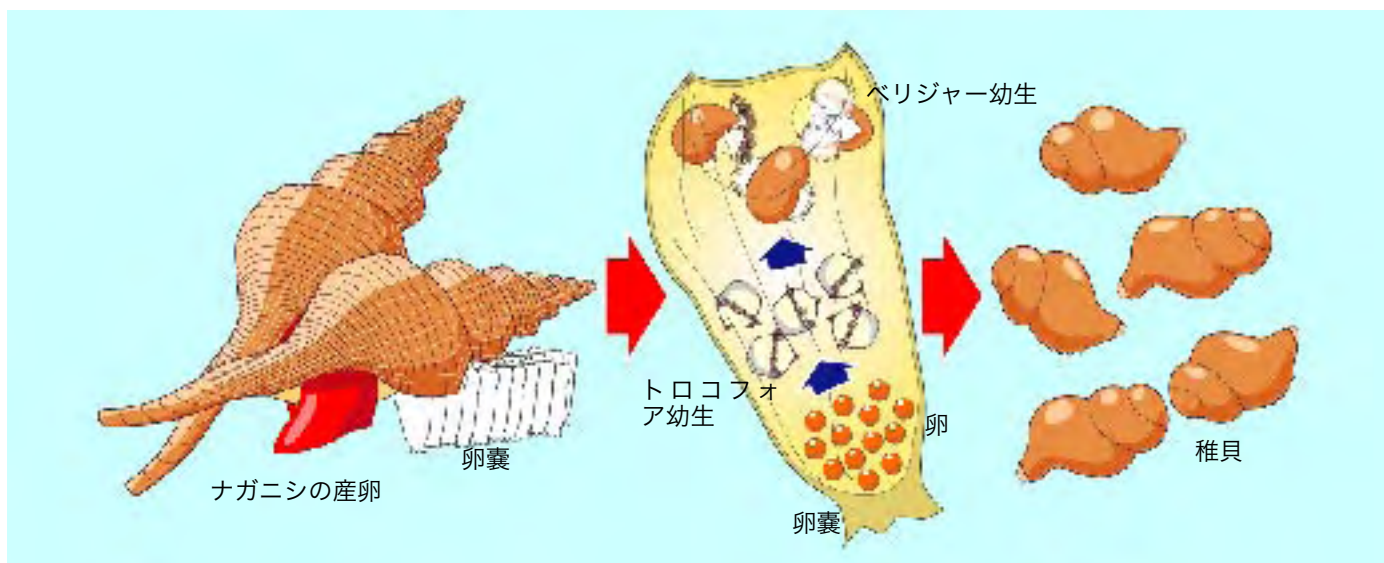


図4 ナガニシの生活史(水試だより205号より)